

悪いな、お前ら。俺は、人生の勝ち組ポツクルに転生していたらしいぜ。

モゾモゾ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポックルの無双物が書きたいです。

でも、ポックルに無双は似合わないのでほどほどに活躍します。

週一以内に投稿し続けられたいなと考えながら頑張ります。

パソコン初心者なのでゆっくりで申し訳ないですが

楽しみにしていてください。

目次

胡蝶の夢	1
世にも不思議な男の娘	6
僕と私と俺	10
才能の片鱗	16

胡蝶の夢

俺は、近所の友達に頼まれ木に登って果物を取っていた。

味は美味しいが木のとっぺん付近にしかない特殊な実で、いつも遊ぶメンバーの中で一番動ける俺が取ることになっている。

そんないつもの光景だったが、生憎、前日が雨だったこともあり滑って木から落ちた。

見る景色が次々と変わる中、体に近い枝で速度を落とそうとしたが手が弾かれ、頭から落ちる。

友達は、医者を呼んだり体を休ませようと横にさせたりとてんやわんやしている。

そんなことを虚ろな目で見ていて、ふと思い出した。
あれ？似たような経験したことあるぞと。

確か、俺が晩御飯の材料を買いに近所のスーパーに向かっていると、横断歩道の真ん中で、ヒールが折れてるお姉さんがいた。

俺は、もちろん助けにいったさ。

走って救出しに向かう所を、女性を避けるためにハンドルを急に曲げた車にぶつかったがな。

俺の周りが血溜まりになっている中、お姉さんは、いなくなるわ。車は、逃げ出すわ。

助けを求めることもできずにそのまま俺の意識がなくなったはず
：

俺死んだんじゃないのか？

あの時と違って、今は友達が救助を呼んでくれている。

あの時？あの時っていつだ？

車に轢かれるどころか、車を見ることすら珍しい森の中だぞ。

それに店もこじんまりした店が多く、思い出みたいな大きい建物なんかもない。

痛みを堪えながら、考えがまとまらず目を閉じていると

「おい！ポツクル。大丈夫か？今医者呼んできたからな。悪かったよ
：おれが、甘いもの食べた言って言ったせいで。腕も折れちまっ
てるし」

ポツクル。俺の名か？もつと、ごちやごちやした名前じゃなかつた
か？

いや、その名前に聞き覚えがあるぞ。

あれは、確か。

「せっかく、弓を練習し始めたって喜んでたのに、水を差すようなこと
してしまって。後で、殴つてもいいから、目を開けろ」

弓。ポツクル。なんか引つかかる。何かもう一押しあれば思い出
せるのに。

「つち。大丈夫だから落ち着け。自分のミスだから別に、殴らねえよ。
それより、声が頭に響くから抑えろ」

「わりい。つて、ほら来てくれたぞ。もう安心だからな」

「おい、悪ガキども。あれだけ、危ないから登るなよってハンターの人
に言われてただろうが。さっさと直してやるから、場所移動するぞ」
ハンター。

そうハンターだ。全部つながった。何か聞き覚えのある名前や職
業。

ここは、ハンターハンターの世界だ。

「先生！ポツクルが気絶した!!」

「お、こいつは、やべえな。急ぐぞ！」

あの後、医者から右腕骨折と頭部を強く打ったせいで軽い記憶喪失といわれた。

たんこぶもあるが、それは勝手に治るだろう。

現在は、親に怒られた後で部屋でゆっくり休んでいる。

友達も謝りに来たが、平気だから安心しろと伝えたと笑顔になって帰っていった。

彼も後で怒られるのだろう。

それは、さておき完全に思い出したぞ。

ここは、ジャンプ屈指の死亡率を誇るハンターハンターの世界ではなからうか。

この血生臭い世界にはある意味、ワンピースよりも現実味のあるお宝や秘宝がある。

それにハンターには、ロマンがある。

ハンターとは怪物・財宝・賞金首・美食・遺跡・幻獣など、稀少な事物を追求することに生涯をかける人々の総称。

ハンター自体は自称であるが、プロハンターの資格を有さない者はアマチュアとみなされる。

プロのハンターの資格を得るには、数百万分の一の難関と言われるハンター試験を突破しなければならない。

しかし、この試験に合格してもさらに念能力を試す裏試験があり、これも突破しなければ一人前のハンターとはされない。ハンター試験に合格したプロハンターは全員がハンター協会の会員となる。現在の会員数は660名ほど。

一口にハンターと言っても、世界の財宝発掘を専門とする財宝ハン

ターやブラックリストに載っている犯罪者を捕らえることを専門とする賞金首ハンターといったように専門分野の違いによって様々に分かれている。ただし、これはハンターになった後本人がどのような仕事を重点的に行うかによる俗称であり、ハンター資格に種類があるわけではない。

この世界においてハンター協会は国境を超えて信頼性を持ち、そこに属するプロハンターはライセンスの持つ絶対的特権もあって莫大な富と名声を得られる。この世界での長者番付上位10名のうち6名がプロハンターであるなど「世界一儲かる」「世界一気高い」仕事であるとされる。

ハンター協会により「ハンター十ヶ条」が定められており、プロハンターの選出方法、プロとなったものの行動指針、ハンター協会の会長や参謀の選出方法など協会の運営方法などが規定されている。

前世の俺についてそこそこ思い出したが、あまりいい生活はできていなかった。

やりたいことを進んでやるには、規則が厳しすぎた。

金やコネ等、足りない物が多かった。

楽しくもない仕事、達成感のない仕事。

奴隷のようにただ、流されるままに生きてきた。

だが、あの生活はお終いだ。

ハンターになれば、全てが叶う。

俺は、生まれ変わった。

なんなら、この世界について、アドバンテージがあるんだ。

本で読んだ俺の姿は確か、幻獣ハンターを名乗っていた。第287期ハンター試験合格者。

三白眼で帽子をかぶった小柄な青年。

弓を使った狩猟が得意で、しびれ薬も併用しており同期のゴンにハンターとしての見本っぽいのを魅せた。

夢を追うひたむきな性格。ただ血気にはやりやすいのが玉に瑕。

戦いに関しては他の最終試験に残った受験生に一步劣っているが、

ハンターとしての素質は高く評価されていた。二回戦でハンゾーとの圧倒的な力量差を前に降参するも、キルアの失格に伴い合格する。

そのあとに登場したのがキメラアント編でポンズら仲間と共にNGLで活動していた。

そこでキメラアントの調査・討伐に当たっていたが、ザザン隊の蟻に見つかってしまい、仲間を全て殺され自分も生け捕りにされる。

その後、運ばれた先の巣から脱出しようとするが、ネフェルピトーの「円」で発見されてしまう。最期は頭蓋骨をひっぺがされ、剥き出しとなった脳に物理的的刺激を与え自白を引き出すと言う猟奇的な方法で念能力の知識を絞り出された後、屠畜され女王の糧となった。

糧となるのか：

記憶が戻らなかつた方が良いのか悪いのか。

いや、結局のところ努力をしなければ人間大成しないんだ。

才能の有る人間に生まれたんだ。後はそれを活かすだけ。

今の目標は、ハンター試験に合格できる程の実力をつけること。

人生の目標は、キメラアントにくちゆくちゆされないこと！

今からなら、時間もある。

俺は強くなれるんだ。

俺のハンターとしての旅路はこれからだ！

黙っておとなしくしてろ、と親に怒られたのでふて寝した。

まずは、腕を治してからかな。

世にも不思議な男の娘

あれから、数日が経ち体調がよくなってきた。

俺は、腕を吊るしながら情報収集、この前の事故の時の友達と歩いている。

彼の名は、ヨシユア。

顔立ちが、女性のように体つきも、華奢。

生まれてきた性別が、違う男の娘筆頭だ。

以前、苛められていたところを助けた記憶がある。

この村で数少ない同年代のやつで、近所に住んでいる。

彼の、両親は片親らしく、しかも村長で忙しい。

遊び相手のいない閑散とした村で俺ぐらいしか、同期の友達がいな
いそうだ。

そんな彼と話をしていた。

「俺って、何歳くらいに見える?」

「同年代の僕から見ても、幼く見えるよ。ポツクルは身長が小さいか
らね」

俺が気にしていることを躊躇もせずと言う。

しかし、こいつは、不思議なやつだ。

ここ3年、一緒に遊んだり、馬鹿やったりするが一人称がころころ
変わる。

焦ったり、緊急時だと俺になり、普段落ち着いているときは、僕。
この間ゴキブリを見たときは私になっていた。多重人格者か?

「でも、8歳なんだから、みんなそんなものだって。お医者さんが言っ
ていたよ」

「俺の知っている8歳って俺より背の高いやつしかいないんだけど」

「ふふふ。でも、いきなりどうして歳のことを?」

「子供と思われて、やりたい作業もできないし、できることも少ない。
身長があった方が、なにかと便利だしな。だから今のうちに身長は伸

びて欲しいな。やりたいことがあるから、体が資本だし」

「ポックルは、何になりたいの？ 獵師？ お父さんがそうだしね」

「俺、ハンターになりたいんだよ。その為にも、もっと鍛えぬかないとな。ってどうした？ 立ち止まって」

彼の顔が、青ざめていく。

なんか変なこといったか？

「ダメだよ！ 危ないよ！ 死んじゃうよ。この村で一緒に過ごそうよ」

「い、いきなり、どうした？ いいじゃないか。ハンター。夢もロマンもある。金も稼げるし、俺の趣味の動物ともたくさん触れ合える」

「ポックルは、優しいところがあるから動物に襲われて死んじゃいそうでダメだよ！」

「えらい、具体的だな。でも、なると決めたんだ。今から、体を鍛えて一流のハンターになる」

そう言うのと、ため息をつきながら、やっぱりこうなるかと呟いていた。

やっぱり？

今まで話したことなかったはずなのに。何故？

「なら、僕も目指すよ。ハンター。ポックル一人だけだと心配だしね」

「いや、お前運動苦手だろ。それこそ、むりなんじゃないのか？」

「なら、あそこの木まで勝負する？ だいたい、50メートルでしょ。僕が、勝ったら反対しないでよ」

「まあ、いいけど。本気で行くぞ。この枝が落ちたらスタートな」

ヨシユアは頷き、俺は空高く枝を投げる。

彼には悪いが、危ない目にあつて欲しくないなので、全力でいかせてもらう。

そして、いざスタートを切ろうとした瞬間

全身に寒気を感じた。今まで味わったことのない悪寒。

スタートを切ろうとする体がただただ、前のめりになるだけで足は前に進まない。

彼は、大丈夫だろうかと思いき横を見ると、笑っていた。

「どうしたの？枝は、もう落ちたよ？ああ、やっぱり、考え直してわざと止まってくれていたんだね」

ヨシユアは、笑う。

なんの裏もないキレイな顔でまっすぐ俺の瞳を見つめていた。

「それじゃあ先にいかせてもらうよ」

「ま、まて」

なんとか、声を絞り出して向かおうとするが、その時には、既にゴール地点には彼がいた。地面にくつきりと踏みつけた後を残して。

ヨシユア。おまえは、いったい何者なんだ。

あの後、体の震えが止まった俺にヨシユアが近づいてきた。

「僕の勝ちだね。文句は聞かないよ」

「ああ。だが、いったい何をしたんだ。体が動かなくなったぞ」

「あれは、念といつてね。ハンターになるんだったら絶対に必要な能

力さ」

念。知っている。だがなぜ、それをヨシユアが知ってるんだろう。

「僕が、付きつきり教えて上げる。念のことも他のことも
体を舐め回すように見てくる。」

俺の気のせいなんだろうか。

それとも、体調を気にして見ているんだろうか。

先程の念のせいでまともな思考のできない俺であった。

僕と私と俺

彼の後ろをホイホイ着いていくこと、十分。

行先は、彼の家だった。

先行きが不安になる中、彼がうちの家より数段大きいドアを開ける。

村長は、仕事でいないのか静かな家の中で迷いなく自分の部屋を開けるヨシユア。

いつもは、我が物顔で大きいベッドに突撃するが嫌な予感がした。普段通りの部屋で、いつもと違う彼。

不思議と落ち着かなく、部屋に備え付けてある椅子に座り込む。

「それじゃあ、何から教えようか？」

「念ってなんだ？お前は、一体それをどこで知ったんだ？」

「わかった。まずは念のことについてだね」

念については、思い出したといっても完全ではない。

彼から聞いた方が詳しく知れると踏んで聞いたのもある。

それに、こいつは、何かを隠している気がして堪らない。

こいつから、独特な匂い。

そう胡散臭い香りがするのだ。

親父が、浮気をごまかしていた時も感じたこの感覚。

人の目で分らない感覚は、大事にした方がいい。

この世界なら、なおさらな。

ヨシユアは、自己主張の少なかった子だと今まで思ってた。それが、俺がハンターになると聞いて豹変したのである。

ひとまず話を聞いて判断するのが吉と見た。

「念ってというのは、不思議な力。人には見えない、オーラとよばれる生命エネルギーを、自在に操る能力のことをいうんだ。ポツクルのなりたいハンターは仕事柄、未知の領域に踏み込むことが多くて、念が使えないと一人前のハンターとして認めてもらえないばかりか、命を危

険に晒しかねないそんな危険な職業なの。でも大丈夫。公的には隠された技能で習熟度に個人差があるけど誰でも使える力だからじっくり学んでいこう」

なるほど、わかりやすい説明だが奴自身ミスをしたな。

【何故こんな公共機関の少ない環境で公的に隠されている技能のことを、ただの村長の息子が知っているのか】

このことを聞いても、まだ簡単にはぐらかされるが覚えていることで後々、何か気付くかもしれない。

「だいたい分かった。ありがとう。次に、どこで知ったのか教えてもらっていいか？」

「うーん。教えたいのは、山々んだけど実はこれハンターさんに口止めされているんだ」

「ハンターさん？あの時々、魔獣や害獣を退治しに来てくれる、槍を持った人の事か？」

「そうなんだ。僕は教えたいんだけどね。ごめんね。その人に許可を得てからだったらいよいよ」

俺は、話したことの無いそのハンター。

村の人達が言うには評判のいい人らしいがその人が現れるようになったのは、ここ最近のことだ。

俺の親が猟師ということもあり山での狩の仕方や注意点など、聞いてみたいことや教えて欲しいことが山ほどある。

だが俺が彼に近寄ると、急に焦って動き出す。

その時の彼は、俺を見て離れようとしたのか。

俺の隣で、いつも行動しているヨシユアに反応しているのかは定かではないがな。

そんな、ハンターと話をつけろと言ってくるがほとんど無理と思っ
といた方がよさそうだ。

ハンターとヨシユアはグルなんだろうか。

そんなことが頭をよぎるが俺は言った。

「なるほどなあ、色々教えてくれてありがとな。頼りになるぜ！流石ヨシユアだな」

実際彼が色々情報を取得して、共有してくれることが多い。値千金な活躍も多々ある。

下手なこと言つて、彼が拗ねて何も教えてくれないのは困る。

彼からハンター募集の情報を仕入れてくれないと現在の環境だと難しすぎるのだ。

彼が何を隠しているのかが知りたいがあまり、疑いから入るのも良くないだろう。

今は、有難く教えてもらうことに感謝をしとかないといけないな。

「ううんー！いいんだよ！僕とポツクルの仲じゃないか」

彼は、嬉しいのか近寄ってきて俺を抱きしめる。

色々疑いから入るから、変に感じているんだ。

まだ、8歳。

前世の俺が8歳の時は、何も考えず「うんこ！」と言つて笑つてたくらいだ。

偶々。

俺の勘も、そう偶然間違つていただけだと思おう。

「そしたら、念を覚える前の事前知識だね。肉体の精孔という部分からあふれ出る、オーラを自在に操る必要があるんだけどそれを覚えるには2通りあるんだ」

「2通り？」

「そう。まず一つは己自身で念を習得する。自身の体内にある精孔を瞑想などで自覚する必要があつて、習得には時間がかかるけど安全な方法。二つ目は未習得の人間に念使いのオーラ攻撃を受けさせて念に目覚めさせるって方法。それはもし生き残ればということであり、仮に覚醒しても身体を壊され後遺症を負っていることも珍しくないの。でも、そこは安心して。僕が優しく教えてあげるから。ポツクルに怪我一つ負わせないよ」

ヨシユアが後者を勧めてくるが俺は既に決めていた。

「いや、気持ちは有り難いが遠慮するよ」

「何で？こつちの方が圧倒的に早いし直ぐに終わるよ？」

「お前を信じているし、色々教えてくれて感謝している。でも、何でもかんでも頼り続けるのは、友達とは言わないだろ？だから、俺は俺自身の手で念を覚えてみるよ」

「そう、ならこれだけでも受け取ってくれないかしら？」

「ん？なんだ？」

「本当は、ポツクルが念を覚えてから渡したかったんだけど私の念能力で作ったトレーニング道具」

ヨシユアから、渡されたのは黒バラのチョーク。これで一体何を鍛えるんだらう。

「このチョークは、毎日体全体に重量を付与する能力がついているの。私で作ったのはいいんだけどもう使わないからポツクルにあげるわ」

「お、いいのか。そんな大事なものもらっても」

「ええ。使わない私が持つても仕方がないし、それならこれから鍛えるポツクルに使ってもらうのがこの能力もうれしいと思うの。もういらなくなったり、重量がきつくなったりしたら私にギブアップといえばすぐに取ってあげるわ」

早速着けようとするが、手が滑る。

ヨシユアに着けてもらったがあまり変化は感じない。

だが彼から貰ったものだ。

大事に使わせてもらおう。

「どうだ、似合うか？」

「すごく素敵だよ。やっぱりポツクルは、何着けても似合うね」

部屋にある鏡で見してみるが、案外悪くないかもな。黒バラがカツコよさを引き出していて気にいってしまった。

「ポックルがギブアップって言うのを待ちながら応援しているよ。どうしても、念が覚えられなかったら僕に言っただけ」

「へっ！言ってる！絶対諦めないし、念も習得してやるよ！」

俺は、意気揚々とヨシユアの部屋を出て村長の家から飛び出した。

これからは、楽しみで仕方がない。

ヨシユアの一人称が変わったのが気付かないくらいに。

ヨシユア side

「ホント、ポックルは可愛いなあ。食べちゃいたいくらい」

僕の家を飛び出した、ポックルの姿を自室の窓から眺めている。

私が作った能力があんなものじゃないはずなのに。早く僕の物になるのが待ち遠しい。

念の習得を断ったのは焦ったけどカッコいい姿も見れたし万事オツケー。

そんなことを考えていると、誰もいないはずの部屋に侵入者が入ってくる。

せつかく、僕がポックルとの余韻を楽しんでいたのに。

「マスター、いいのかよ。あの坊主、念を早いとこ覚えないと自分の重さに耐え切れずに死ぬぜ？」

「いいんだ。それはそれで。彼が涙を流しながら、僕に懇願する仕草を想像するだけでよだれが出そうだよ。」

「結構な趣味をお持ちで。それで、俺は遠くからあいつを観察しとけ

「ばいいのか？」

「うん。彼が本当に無理そうだったら、僕を呼んでよ。すぐに飛んでいくからさ」

「へいへい。俺もあの坊主も女運がわりいな。(こっちは、男だけど)」
「ランサー。今なんか変なこと考えなかつた？」

「何でもねえよ。ほんじゃ、早速あいつの後を追って様子を探ってくるよ」

あの犬、生意気になったな。

お仕置きとしてそのうち、隣の島まで買い物いかせよう。

才能の片鱗

あの後、一旦家に帰り作戦を立てる。

やはりこの世界はハンターハンターの世界なんだと改めて実感した。

目には、見えない不思議な力。

原作では、ポックルも念能力を使っていたことで俺自身も使える可能性があるとということが分かっている。

記憶を取り戻してから、試そうとしたがいまいちこの世界が本物か偽物か心のどこかで考えていたんだ。

偶々、ポックルという名前になったんではないか？

ハンターって言っても、ちよつとした獣とか害獣くらいしか倒してないのでは？

似たような設定の違う世界に行ったのでは？

気持ちの整理が中々できていなかったんだろう。

ヨシユアの行動が、言動がくしくも本当にハンターハンターの世界に来たんだと体に思い知らされた。

あの時初めて受けた念への恐怖。

使い次第では、武器にも凶器にもなる力。

俺は本当にこの力を使えるのか。

瞑想なんて、ガラじゃないがやってみる。

全然集中できない。

興奮していることもあり落ち着くことができないんだろう。

今日だけでも様々なことが起きた。

それを飲み込むにも時間のかかる作業だと思うし、はつきり言ってみるは俺自身苦手なんだろうと思う。

なので、一番最初にすることは自分の集中できることを探すことから始めるべきなのではと考えた。

俺が得意なこと。集中できること。

ゲーム、漫画、前世の俺は好きなことに集中できる奴だった。

宿題や課題は苦手で夏休みの宿題なんか最後まで残すタイプ。そんな俺が、現在はまっていること。部屋中を探し回る。ダーツや、軍議があったが面白いだけでそこまで持たない。どうしようかと壁を見る。

そこには、親父から貰った子供用の弓が立てかけてあった。

骨折してから全く触れていなかったが、弓に触っている時だけは時間を忘れられた。

楽しかった。的に当たる。当たらない関係なしに夢中になれたんだ。

俺は片手で弓を抱え、家から少し離れた丘に登った。

少し離れたところにある丘では、周りの山の風景も見える絶景スポットだ。

片手では、弓を番えることはできないが構わない。

構えた状態から見える世界は俺を虜にすることができた。

多分これが、一番集中できる態勢なのだろう。

周りには、数多くの動物が生息し代わり映えしない世界なんてない。
い。

世界は生きている。俺は、ただただ構えた状態で観察していた。

ランサースide

(あいつ、伸びるな。)

あの歳で、しっかり自分の長所を見つけてやがる。

いいハンターになるだろう。

うちのマスターにも、爪の垢を煎じて飲ましてやりてえよ。

喜ぶかもしれないねえけどな。

才能に胡坐かいて、鍛えることもあまりしないマスターより強くなるセンスがある。

集中の仕方も並じゃねえ。

試しに坊主の周辺に音の小さそうな小石を投げてみたが音がした瞬間にしっかりと構えやがる。

坊主なりの瞑想の仕方だろうが悪くねえな。

後は、重さに耐えきり念を習得できるかの勝負だろう。

俺は、アドバイスはできねえけど陰ながら応援してるぜ。

結局この日は、何の成果も得られなかった。

いや、集中できる態勢を覚えた。

後は、適度に運動しながら今日の続きを繰り返してみよう。

少しずついい。確実に成長しているのが実感できた。

修行2日目

残念ながら、悠長なことは言えなくなった。

今朝起きると明らかに全身に重さを感じたので体重計で測る。

俺の昨日の体重が32kg。今朝測ると40kg。

昨日より、8kg増えている。

明らかに重くなった。この念具の能力だろう。

甘く見過ぎた。

一日1kg程度と考えていた俺は、心臓の動悸を隠せられなかった。もしこの念具が外れなかったことを考えると怖くて仕方がない。

ヨシユアにああ言ったものの、本当に習得ないし重量を耐えきれないだろうか。

重い体を動かしながら今日も昨日と同じ場所へ向かう。

狙いは、まだ気にする程ずれはしないが疲労による負担が昨日よりも大きい。

ある程度集中できたが、前日に比べるとあまり効率は良くないように感じた。

明日への恐怖が日に日に増していく時間を過ごしあまり眠れない日だった。

修行3日目

今日で体重半分の16kgプラスされた。

現在、悩んでいる。

このまま念の修行に励むべきか、体を本格的に苛め抜くか。

このまま、念の修行をしていけばなにかを掴みそうな気がする。

だが、体が持つか分からない。

重さの影響で集中力が持たないのだ。

足の負担。

腕が保てない。

立ちくらみがする。

疲労の抜けないこの体。

正直舐めていた。

自分ならいけるんじゃないのか。

主人公達の化け物っぷりが改めてわかる。

昨夜、夢うつつのなかずっと考えていた。

下手な意地を張らずギブアップって言って彼に教えてもらった方

がよかつたんではないか。

どうしようもない、弱い自分がいた。

そんな自分が嫌いにもなりそうだった。

涙がほほを伝う。

枕に染みを作り冷たさが不快感を生む。

自分の心の弱さが染みだしているみたいだ。

これでは、前世の俺とにも変わらない。

俺は、歯を食いしばってベッドから起き上がり丘へと走り出した。

修行4日目

昨日の様な弱い自分は未だに心に燻っている。

時間は有限なので、とにかく体を動かす。

この日は疲労により意識を途中でなくした。

だが、気絶から覚めると地面に書置きと少しだけ体が軽くなっていった。

地面には、『頑張れよ。』その一言だけだった。

親父が近くを通ったのだろうか…

修行5日目

身体は疲労とストレスで、できている。

血潮は、鉛で。間接は油の切れた、機械のようにギシギシ響く。

だが、今日で体重が2ポツクルになった。

なんなら、修行後で飯を無理やり食ったから、体重が増えている。

まだ俺はやれる。やれている。

なら、いつものように丘を目指し走りこむだけだ。

自分の限界を決めつけない。

諦めたくない。

その執念で今日も体を動かす。

修行6日目

今日も気絶した。

疲労も溜まっている。当然だ。

気絶する頻度も増えてはいるが、体の動き自体はまだぎこちなさはあれどキレはある。

体重が増えたことで親父が作ったであろう椅子もとうとう壊してしまった。

ベッドも子供用だ、いつまで持つのだろう。

ベッドの悲鳴を聞きながら疲れの取れない体を少しでも楽にするため今日も横になる。

修行7日目

1週間経った。

明らかに身体は力を増している。

疲労もインフレ状態だ。

常に最高の状態を維持している。

ストツプ高を更新している。

鍛えていくたびに賢さが下がっていく気分だ。

だが、今日は久々にヨシユアの顔を見た。

俺の様子を探りに来たんだろうか。

彼は、俺の調子を聞きに来てギブアップするかと聞いてきた。

彼からその言葉が出てきたとき俺の弱音が悲鳴をあげかけた。

やめたい。つらい。俺の負けだ。

俺の顔は、どうなっているだろう。

歪んでいたのは間違いないだろうな。

俺は、口を噛みしめて血が出るのを構わず断った。

「ヨシユアには気を使わせて悪いが案外このトレーニング気に入っているんだ。まだまだ余裕だから心配すんな」

急いで、彼から離れる。

あそこに留まっていると気が狂いそうになったからだ。

啞然としたヨシユアを後にして、丘へと走り出す。
もう、賽は投げられた。

俺は、まだあきらめたくはない。

まだ、何も成し遂げていない。

ヨシユア side

「何で…どうして、そこまで頑張れるの？もう限界のはずなのに…
んなはずじゃなかった」

最後に見た彼の表情が忘れられない。

ランサーからも報告を聞いた感じだと、何回も気絶しているそう
だ。

区切りの良い1週間。

やめるには、丁度いいタイミング。

体の芯もぶれて、足が上がり切っていないのかつまずきそうになっ
ている。

私自身が仮に試したときはすぐにやめた。

常にストレスが溜まって仕方がないからだ。

その時よりも強めの念に設定したのに。

なのに、なぜ…。

「マスターには、分からんかもしれないけど男には意地があんだよ。体は立てなくとも、心は死んでない。心が死なない限り、地を這ってでも動き続けるもんさ」

「僕の体は、男だけど分らないよ。彼には、早く楽になってほしい。あの顔を見たら、念具なんかあげなきやよかつたと思ってしまうくらいに」

「そりや、マスターの心が女だからだろ。いいから、坊主のことは俺に任せとけ。マスターは、力が出る差し入れなんか作って送ってやればいいんだよ。頑張つてとか言つてな。あんな、質の悪い念具なんか使わなくても男なんて単純なんだから、ころつと好きになつてくれるぜ。俺の叔父貴なんて、女性に気を使われただけで求婚するからな」
「そうかな…分かつた。一先ず、体に優しそうな作って差し入れ送ってみるよ。あと、人の作つた念具を質の悪いって言つたランサーは隣の島まで買い出ししててね」

「うげっ。照れ隠しでやる内容じゃないだろ。何日かかると思つてんだ」

「さっさと行け!!」

ランサーを呼び出したはいいが、あまり言うことを聞かない。

だが、彼が言っていることも確かなんだろう。

あまりポツクルの気持ちを考えてなかつたのかもしれない。

反省としてランサーがいない間は、私が支えてあげる。

頑張つてほしい気持ちはもちろんあるが、諦めて早く僕の物になつてほしいこの気持ちはおかしいのだろうか。

僕は、悶々とした気持ちのまま一旦家に帰り準備に取り掛かる。

甘いもの食べてくれるかな…。